

挨拶・出席者紹介

司会：この度は、札幌大学三大学院共同シンポジウムにお越しいただきましてありがとうございます。私は司会進行を務めさせていただきます、札幌大学大学院経済学研究科の武者と申します。よろしくお願いいたします。

最初に何点か確認をさせていただきます。まず、お手元の配布資料ですが、これは今回のシンポジウムにおける各先生の報告内容をまとめたものなどです。報告概要の中には質問用紙があります。これから4人の先生にご報告をいただきますが、その後パネルディスカッションを行います。ご質問がありましたら、この質問用紙にてご質問いただき、パネルディスカッションで反映させていただきます。

それでは、まず最初に開催校である札幌大学の桑原学長がご挨拶をするところですが、本日は出席が叶いませんでしたので、代理といたしまして、札幌大学理事、松本よりご挨拶申し上げます。

学校法人札幌大学
理事 松本 源太郎



皆様、ようこそいらっしゃいました。学長に代わりまして、ひとことご挨拶申し上げます。

本日、第10回目の「三大学院共同シンポジウム」を迎えることができ、誠に感慨深いものがありますが、この感激は私だけでのものではありません。

このシンポジウムの開催は、2001年の札幌大学大学院経済学研究科地域経済政策専攻の設置と共に始まりました。札幌大学においては、地方にある経済系の研究科が果たすべき役割として地域経済社会への貢献を重視しましたが、当時、「地域経済政策」を専攻の目的に掲げた研究科が沖縄国際大学と鹿児島国際大学にあり、これらの先輩研究科とネットワークを作り、わが国の周辺から経済社会のあり方を再考しようと考えました。

経済学研究科の初代研究科長は黒柳俊雄先生で、師弟関係にある渡久地朝明先生が沖縄国際大学にいらしたことで、提携関係がスタートしました。黒柳研究科長の後を継

いだ石坂昭雄先生をはじめ、当時この提携に貢献下さった先生については、鹿児島国際大学の衣川先生の「あとがき」に詳しいのでご紹介を省略させていただきますが、諸先輩のご苦勞にはただただ感謝するばかりです。

それよりも、10回の共同シンポジウムで三大学院の研究者が欠かさずに興味深い報告をし、討論を交わし続けることができたことを誇らしく思います。今回は、10周年を記念して、選りすぐりの報告を改めて論文に書き直し、一つの書物にまとめることができました。大変大きな成果であると、これも誇らしく思う次第です。なお、本書の出版を主導した、当時の札幌大学経済学部長であった原田明信先生がこの完成を見ることなく急逝されたことは誠に残念ですが、墓前に報告し喜んでいただきたいと存じます。

さて、三大学院共同シンポジウムは確かに一つの成果に達しました。しかし、これは次の成果に向けた新たな出発です。シンポジウム開始の前年には米国における「9.11」同時多発テロがあり、わが国経済はその後グローバル化を目指して自由化・規制緩和を推し進め、実感を伴わない戦後最長の好景気も経験しました。しかし、個人間の様々な格差が進行し、地域はますます疲弊するばかりです。10年前に増して、地域の研究者が地方復活の研究に邁進しなければならない、となおさら決意を固くするところです。

われわれの営為が自己満足に墮することなく、より広くより深く地方を復活させるエネルギーを生み出すことを念じて、私のご挨拶に代えさせていただきます。

司会：ありがとうございました。次に、4人の先生にご報告いただくにあたりまして、札幌大学大学院経済学研究科長の岩崎より、問題開示ということで、10分ほどお話いただきたいと思います。

札幌大学大学院経済学研究科
研究科長 岩崎 徹



本日は、大変寒い中をお越しいただき、ありがとうございます。おそらく北海道は、本日が今期で一番寒い日のようです。上川町がマイナス16度です。沖縄ではハイビスカスが咲いていて、半袖で生活しているそうです。まさに、日本列島の長さと言いますか、南北の違いを非常に明確に感じる時期だと思えます。この三大学院共同シンポジウムは、北の

端と南の端、北海道と鹿児島、沖縄に立地している3つの大学の共同シンポジウムです。共同シンポジウムが始まったのは2002年です。ですから、ことしは10回目の節目です。先ほどより話に出ております『地方は復活する』という書籍に、この9年間の研究成果をまとめました。編集委員の松本先生、村上先生、菊地先生、本当にご苦勞様でした。最後のあとがきで、衣川先生が見事なまとめと、今後の方向性を示しております。本当に、良い本ができたと喜んでおります。執筆者の皆さんはもちろんのこと、編集者、また各大学から援助をいただきました。本当にありがとうございます。

三大学院共同シンポジウムのテーマはずっと、地域です。今までのテーマを振り返ってみますと、地域づくり、地域開発、構造政策・構造改革と地域、グローバルゼーションと地域、地域と歴史、地域の観光、環境問題などをテーマにしてきました。3つの地域は、まさに、独自の個性を持つ地域です。独自の文化、独自の歴史、独自の経済構造を持っています。しかし同時に、この3地域には共通点があると思います。遠隔地にあること、それから産業構造で言うと、第一次産業と第三次産業の割合が大きくて、第二次産業割合が小さい。建設業、公共投資にかなり依存しているという共通点もあると思います。それから、3地域とも一人当たり県民所得、道民所得が都道府県の中で下のほうで、おそらく3地域ともワースト10に入るかと思います。したがって、有効求人倍率が低く、失業率が高い、こういう地域です。グローバルゼーションのもと、まさに地域格差として、ハンディを背負ってきた地域であります。しかし、この書籍に書かれておりますように、ハンディを乗り越える、デメリットをメリットに換える。地域活性化には、なによりも地域の人たちの情熱と知恵を集めることが大切であります。むしろ、こうした地域こそ、本来の地域活性化ができる、地域づくりができるという意気込みで、これまでシンポジウムを行ってきたと思います。

本日のテーマは地域経済における金融の役割です。今までの開催の中で、実は金融は初めてのテーマです。金融はよく、人間の血液になぞらえられております。地域の実体経済、観光も含めた地域づくりに、健康な血液である金融が脈々と流れる。こういう地域がまさに、活性化する地域であると思います。そういう意味で、今日は、その血液の流れをどう作っていくかという共通のテーマでお話いただきたいと思います。参加者に皆さんもぜひ、有意義に発言されて有効なシンポジウムにして、今後15回、20回とシンポジウムが続くようにご協力をお願いいたします。

続いて、沖縄国際大学、鹿児島国際大学の先生をご紹介します。沖縄は大城先生、鹿児島は菊地先生にご紹介をお願いいたします。

鹿児島国際大学大学院経済学研究科

准教授 菊地 裕幸



鹿児島国際大学からやって参りました菊地と申します。このたび、鹿児島から札幌まで、我々5人で、冷気にあたって身を引き締めようと思い、やって参りました。簡単に紹介させていただきます。まず、鹿児島国際大学副学長の衣川です。それから鹿児島国際大学非常勤講師の韓です。大学院事務室事務長の星田です。今日は10周年記念シンポジウムということで、広報センターの橋口が来ております。今回、記念すべき10周年のシンポジウムに参加できて、我々5人、とても光榮に思っております。このシンポジウムが今後、20年30年と続いていくことを期待するとともに、そのために我々若手が、一層精進して、引っ張っていきけるようにがんばっていきたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

沖縄国際大学大学院地域産業研究科

教授 大城 保



皆さん、こんにちは。北海道はマイナス16度の地域もあるということですが、沖縄では一番寒くても6度、まず10度を切るということがほとんどありません。また、35度を超えるということもございません。ですから10度から35度と25度の差ですが、旭川ですとマイナス40度と40度で80度の差があるということです。本当に日本列島は長いと実感しております。沖縄から5名で参りました。来年は沖縄で開催させていただくことになっておりますので、今日はしっかりと運営状況を見ながら、来年につなげるように勉強させていただきたいと思います。10年という節目で、しっかりした良い書籍もできあがり、その成果がまた、書籍の第二弾、第三弾と続いていくのではないかと思います。それには、三大学で研究をしている皆さんが、しっかりと報告をしていくことが大切になりますの

で、続けて取り組んでいくことをお約束させていただきます。それでは、沖縄から参った先生方を紹介したいと思います。今日、報告をする前泊です。この書籍の編集者としてずっと関わってきている村上です。昨年、鹿児島国際大学で報告をいたしまして、今後おそらく背負っていくであろうリーダーです。来年、沖縄で開催するということで、色々な面を取り仕切っていただく研究支援課の課長比嘉です。私は研究科長の大城です。今日は皆さんと一緒に、意義のあるシンポジウムにしていきたいと考えております。よろしくお願いいたします。

岩崎：札幌大学のメンバーは、懇親会及び二次会のときに紹介いたします。市民のかたもたくさん来ていらっしゃるようで、本当にありがとうございます。